

たぐみ

CraftsmanShip

特集 山陰の民藝

第44号

吉田璋也先生の思い出と 鳥取の新作工藝のこと

たぐみは、柳宗悦と吉田璋也の二人を中心として、民藝運動のなかでも特に新作民藝の普及のための流通の店を作るといふ、強い願いをもって誕生した店であった。

柳たちの活動のなかで、計画的で組織的な民藝品の集荷・販売の事業は、昭和三年(一九二八)二月、昭和天皇の即位を記念して上野公園で開催された御大典記念博覧会の「民藝館」というパビリオンが最初であった。このとき柳、河井寛次郎、濱田庄司、バーナー・リーチを中心とした民藝運動の仲間たちは、手分けして日本各地を歩き、手仕事の現状を調べ、今なお作られる民藝品を集め、この民藝館で販売した。売店の担当であった青山二郎によればそのほとんどが完売されたという。

この経験から柳たちは、地方の作り

手や民藝の理解者たちとの交流を深め、各地方に運動の拠点を作る努力を重ねた。そのひとつが吉田璋也との交流であり、昭和七年(一九三二)六月の、鳥取たぐみ工藝店の開店であった。これらの経緯と昭和八年十二月の東京たぐみの設立の事情については、いずれ別稿で詳しく書きたい。

さて、鳥取の手仕事再生にかける吉田の思いは強く、昭和二十四年春には地場の職人による鳥取民藝協団を結成し、各地でしばしば作品の展示即売会を開いた。さらに翌二十五年九月には「鳥取民芸美術館」が開館した。

私をはじめて鳥取に吉田先生を訪ねたのは昭和三十七年の初夏のころで、この年十月、東横百貨店(渋谷)で開催される「第十回鳥取民藝協団展」の準備のためにかがったのであった。

先生は吉田医院の院長としての多忙な日々のなか、日頃から寸暇を惜しんで工人と会い、自らの信念を説いたが、



吉田璋也デザインの民賞机と民賞椅子

このときも民藝協団加入の工人の所をくまなく回る手配をし、あるいは自ら案内して下さったのであった。
牛の戸窯(小林秀晴)の窯出しでは、私が伝統の鉄絵の徳利や皿、李朝風の花瓶などを選び、さらに土間にあった

かめ、すり鉢や一夜漬けの送品も依頼すると、先生はそんな物も出すのか、といわれた。当時、鳥取では在来の台所用品は粗物といわれ、新作民藝とはつきり区別されていたのだった。

吉田は工人たちに、伝統を守るだけでなく、それをどう現代の生活に活かすか、自らスケッチをし、作らせ、批評をした。そうしたなかで吉田の指導が実を結び、ひとつの特色ある工藝として認められたのが家具、木工の仕事であった。

古来、樺^{けやき}、水目桜^{すみめざくら}、檜^{ひのき}、杉などの樹木に恵まれた因幡^{いなば}地方は木工業が盛んであったという。昭和六年(一九三二)にはじまった吉田による新作家の製作指導には、木工職人五名、漆工二名が参加した。吉田は協団の理念として次の七条を挙げた。「一、材料は用途を吟味し地元材から選ぶ。二、装飾を少なく。三、用途に忠実に、使い易く。四、丈夫で誠実に。五、無

理な技法は避ける。六、趣味性を排す。七、品質を守り、安価を旨とする。」

吉田による、日本的な新しい洋風家具は次第に認められ、日本民藝館の卓子や式場隆三郎邸の応接セット、寝椅子やランプなど名作を生んだ。

だがそれから四十年ほどたって、一九七二年九月の吉田璋也の逝去の頃を境に、鳥取の民藝家具作りの仕事は衰退に向かう。天然乾燥から人工乾燥への転換の技術的な問題、木材や塗料など材料の値上がり、職人の高齢化、流通の隘路など問題は山積した。

このような課題は今ではあらゆる工藝の分野で共通してみられる現象である。しかし、工藝が誰のために、何のためにあるのかを考えたとき、民藝運動の先覚者たちが説き続けた、日本の現代の生活に活きた民藝とは何か、という永遠の命題を、私たちはあらためて心に刻み、日々努力するしかないと思う。(志賀直邦)

山陰の前期・民藝運動とその先駆性について

志賀 直邦

さいきん松江の老舗旅館・皆美館の経営者が替わったという噂を聞いて、思い出したことがあった。

松江は、茶人大名として知られた松平不昧公の城下町だけあって、江戸時代から茶道や陶芸作りが盛んであった。なかでも宍道湖畔の布志名焼は数

多くの窯が、明治維新以降も時流に応じて盛衰をくり返してきた。

昭和の初年、柳宗悦、河井寛次郎、濱田庄司を中心とした民藝運動の人たちが、どのようなことがきつかけで松江の陶工たちを知るようになったのか。



袖師窯 前左から十草丸鉢、盃二個、梅文飯碗、掛分徳利



袖師窯 三つ子葉味入れ(左)、くつ型灰皿

この折の島根民藝の事情について、柳の協力者であった大田直行（松江商工会議所理事）は後にこう書いている。昭和三年の「御大典記念博覧会の民藝館に陳列する日用雑器を全国から蒐められた時、偶々来陰の柳、河井両氏が尺余の雪の中から報恩寺窯の陶器を拾い出したのが縁となって、布志名に再び『下手物』すなわち民藝が甦った。若き陶工船木道忠は三年間の苦悶から今や朗らかに奮い立った。彼は、新しく窯を作って日用雑器の製作に没頭しはじめた。続いて出雲陶器会社も若き一陶工福間定義の熱烈な唱導によって多数の工人を擁しながら最も困難な民藝運動に邁進しはじめた。また以前に布志名焼を作ったことのある松江の袖師窯でも、若主人の尾野敏郎がこれらと相呼応して奮起した。」（「工藝」七年三月稿、『布志名窯の今昔』）これらの窯は今もなおそれぞれ後継の作り手によって健全な仕事が営まれている。

このあと柳は、濱田とともに欧米へ



船木研兒 黄釉押文楕円鉢



牛の戸窯
左から 鍋一輪差、染分尺皿、染分片口

の旅に発つ。そして一年三ヶ月ののち
帰朝し、六年一月、かねてから計画の
雑誌「工藝」を発刊する。そして更に
精力的に各地の民藝の調査と講演会を
行っているが、ここではまず六年八月
四日の大田直行主催の「民藝晩餐会」
について紹介しておきたい。

この会は「柳氏の提案によつて一夕
松江の皆美館という旅館で開いたが、
列座の人々には将来民藝運動の進展上
もつとも関係ある官民有力者のみを選

んだ。この晩餐会は『正しい工藝』は
必ず用と結びついているのだから、直
かに物を使つて見せるのが一番早分か
りて間違いないという理念から試みら
れたものである。果たして来会者はい
ずれも『ぼてぼて茶』の前奏曲から最
後の曲目の薄茶に至るまで賛辞と歓喜
の連発で、中には早速『今夕使用され
た器物を一組だけでも是非分譲して欲
しい』と申し込む人さえあった」と大
田は記している。(「工藝」六年八月稿)

この晩餐会の使用器物はそのすべて
を県産の正しい工藝品を用い、また廣
瀬の絵絣を床の掛物に転用するなど工
夫をこらしたという。山陰の鶴、亀や
扇面などの絵絣の柄を茶席の掛け物に
用いたのは、おそらくこのときが最初
であろう。この折、松江市内で河井寛
次郎が作陶展を開いていたから、柳の
見立てで河井の器や茶碗が食卓を飾
り、また布志名の船木、福岡、尾野ら
三人の若き陶工たちの新作の食器が披
露されたことはいうまでもない。

因みにこの日の出席者は、柳宗悦、
河井寛次郎、吉田璋也、松崎内務部長、
高安日銀支店長、恒松県会議長、桑原
洋次郎、土谷市会議長、大場商工課長、
金子工業試験場長、原本虎一郎、それ
に世話人の楠五郎大阪毎日支局長、大
田直行の計十三名であった。

右の内、吉田璋也は鳥取の医師で、
若い頃より学友式場隆三郎と共に柳や
河井、志賀直哉と交友を持ち、昭和六
年(一九三一)頃からは大田直行と共に
山陰地方の民藝運動のリーダー的存在

在であった。その年十月、京都の大都会館にて「第一回山陰民藝展」が開かれ、十一月には東京銀座の資生堂にて「山陰新工藝展」が開催された。

翌七年一月六日、吉田、大田は鳥取市内で、来訪された柳宗悦、高柳兵衛（浜松に作られた最初の日本民藝館主）を迎えて深更まで山陰での民藝運動について協議した。そして五月五日から七日間、大阪高島屋で「山陰新民藝展」が開催された。その月二十四日、濱田庄司が来松。翌日より船木窯にて自作



湯町窯 左から耳付サラダ鉢、スリッ角皿、カレー入れ

品を製作し、かたわら船木、尾野、福岡三氏を指導。さらに石見の大森、温泉津、大田と湯町の出雲陶器会社で主に火鉢の作り方について教えたという。

そして二十九日の夜、皆美館にて濱田氏を歓迎かたがた「島根民藝会」の発会式が挙行された。出席者は先述の方々は略すが、新たに森永重治（安来織の創製者）、河井善右衛門（木工家）、金田勝造（金工家）、安部栄四郎（紙漉き業）ほかで工人が半数を占めた。



湯町窯 耳付スープ碗皿二種

鳥取では七年（一九三二）六月一日、吉田璋也、山本龍蔵、萩原正、徳田泰次郎らによつて匿名組合の「鳥取民藝振興会」が設立され、同じ日、市内本町若桜街道に「たくみ工藝店」（柳宗悦の命名）が開店した。この時、濱田は松江から、柳は倉敷から鳥取たくみの開店を祝つて訪れている。

さて、以上は昭和になつてから、七年の鳥取たくみ開店までの、山陰民藝運動前史の、ごく一部である。このあと八年（一九三三）十二月の東京たくみの開店、九年七月の日本民藝協会の設立、十一年十月の日本民藝館の開館と続き、民藝運動はより活性化する。

それにしても八十余年に及ぶ民藝運動において、地方における活動が、（例えば東北、北陸、山陽、九州、沖縄など）どれほど多くの同志に支えられてきたのか、それらの先人の肉声や肖像を知る人がいる、まだ今のうちに明らかにしなければならぬと思う。私も東京たくみの歴史も含めいづれ稿をあらためたい。

たくみ企画展

「山陰の民藝」特集

会期 平成二十一年七月二十五日(土)～八月八日(土)

七月二十六日(日)は営業いたしません。八月二日(日)は休業。

会場 銀座たくみ二階ギャラリー

午前十一時～午後七時(日曜日、最終日は午後五時半まで)



出西窯
鉄砂引エッグベーカー(左)、内外刷毛目飯碗

山陰地方は日本海に面して物流に恵まれ、昔から緋などの織物、陶器作り、鉱業、林業や漁業が盛んでした。今では所得の低い県の代表のようにいわれますが、実はきわめて豊かで、文化的成熟度も高い地方だと思われま

す。
量産の工業製品に押されて手仕事之急速に衰退した昭和の初め、柳宗悦たちの呼びかけに応じて民藝運動の道に足を踏み入れた工人たちは、それから試行錯誤をくりかえしながら数十年にわたって伝統の技を守り、伝えてきました。

それらの品々をあらためてご覧に入れたく、ご案内いたします。

出品品目

- ・陶器
牛の戸窯、岩井窯、船木窯、湯町窯、袖師窯、出西窯、江津窯、ほか
- ・染織
三浜紵、出雲の祝い風呂敷
- ・木工
電気スタンド(ランプ)、盆、茶托、靴べら、ほか
- ・金工
鉄の鍛冶物いろいろ
- ・和紙
岩坂の和紙
- ・郷土玩具
きりん獅子などのお面、ほか



出西窯
左からピッチャー、刷毛目花入、なまこ釉片口



岩井窯 色絵盒子



弓浜絣 紺地宝袋紋のれん



鳥取家具 樺パン台、
パン切ナイフ(上)、果物ナイフ



江津窯 切立傘立二種



鳥取家具 木台スタンド



上: 柳屋本店の張り子面、鬼面と猿面

左: 柳屋本店仕事場で「きりん獅子」製作
作業中の田中達之助さん



上: 高橋鍛冶屋の作品 燭台、火箸、灰ならしなど

右: 高橋鍛冶屋の仕事場



エッセイ 職人の道

瀧田 項一

職人になりたいと希^{ねが}う芸術家もいれば、芸術家と呼ばれたがる職人も近頃多い。

何時しか職人と称^いう意味が混濁し、社会の中でその地位を低下させ、その誇りさえも失わせてしまったのである。とくに過ぎ来しかた五・六十年の間に全てがサラリーマン的に変貌し、職人の意識まで薄れて、モノ作りとしての自信と誇りは、さまざま分野で失ったように思われる。

嘗^かつて、職人達は自分の腕に自信を持ち、玄人（プロ）として他の追従をゆるさぬものを持っていたものである。それが職人であり、世間の人々も高い評価の眼差しでみていたのであ

る。ところが今はそれが無い。職人は無教養な仕事士であつて、一段下の社会の人種と見做^{みな}されがちになつた。

学歴社会というブランド指向が殊の外に蔓延^{はびこ}つた現代社会に由来するのはあるまいか。

職人たる者の業の修め方は、学問によつて身をたてるに等しいほど、その道への励みがあるのである。

そして、その積み重ねた業の中から得た哲学をおのおの持ちあわせているものである。それが職人と称うものがあるが、近頃は中途半端な形だけの職人が蔓延る時代になつた。なにしろ労働法によつて守られた職人達であるから、何時しか仕事への意識も情念も変つたような気がしてならない昨今である。

(陶芸家)

日本民藝夏期学校

鳥取会場

会期 八月二十八日(金)〜三十日(日)
会場 ギャラリーそら

鳥取市栄町六五八―三

第一日

- ・講義「柳宗悦と民藝運動」
杉山 享司
- ・講義「吉田璋也の新作民藝運動」
鳥取民藝協会

第二日

- ・見学 旧吉田医院
- ・公開講演会「鳥取民藝の素晴らしさ」
安西 水丸
- ・リレートーク「吉田璋也を語る」

第三日

- 因幡工房めぐり 湖山池阿弥陀堂
- 山根和紙資料館、中井窯 ほか
- 申込先 鳥取民藝協会
〒六八〇―〇八三一
- 鳥取市栄町六五一 鳥取民藝美術館内
電話 ○八五七―二一―三五〇四

たくみアーカイブス(四) これからの仕事——工芸研究所のことなど——

柳 悦孝

民藝の問題について、いろいろに反省し、これからの方針を立てなければならぬ時に来ている。もう程なく、濱田庄司先生や叔父(宗悦)が帰朝されるので、外国の事情も判り、我々の進むべき方向も検討される事と思う

が、今年度の私の仕事は、新作運動に重点を置きたい。新作運動と云つてもいろいろな面がある。我々がおかれている環境が、だんだん激しく、せわしく、貧しくなるばかりなのだから、少しでも落ちついて、明るく、根深く、愉快な生活が出来るように(これは全く相反する条件のようだが、実際は両者共一つの物だと思ふ)積極的に意を用いた、新しい生活具を作りたい。今年から弟の悦博が独立して仕事を

はじめるので、自然、私自身で、あらためて腰をすえ、植物染料と、手織りの勉強をやりなす事にする。それと共に、出来る限り新しく仕事をする人を養成したいと思う。

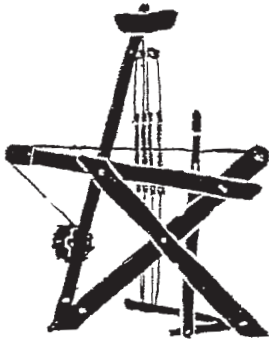
偶然の機会から、女子美術大学で工藝の指導をはじめ、丸四年になるが、若い学生達は意外によい仕事をするようになり、うちの数人は、将来も力になり合えば、有力な仕事をすると思う。工藝人として立たない者でも、おのおの機を織り、染をした事によって、普通の観賞家に比べると理屈抜きで民藝の本質に近づいている事がうかがえる。

物を考える側の仕事は、その専門方におまかせし(これも若手の養成が大

事)物を作る側の方は、物を作る事を伝えて、少しでも多くの人に、民藝の悦びを分かち合いたいと思う。幸い学校の為に作った小型織機が、四年間改造を重ね、ほぼ完全なものとして発表出来る段階になったので二月中に公表したいと思う。

形はたたみ半畳敷きに納まるくらい小型だが、部品の使い方で、絹の着尺から、木綿の緋、毛のシヨールくらい(幅五十cm位)まで染に織れる。家庭用万能織機と云えるもの。戦後住宅が小さくなってるので、昔並みの大型のものでは、どこの家庭内にも持ち込めるといふ訳にはゆかないが、このくらい小さいと廊下の片すみに置くことも出来る。

四年間毎日のように使い、高さや、角度、その他各種の性能を研究したので、能率も良く、使いよいので、狭い私の仕事場では、まことに重宝している。自信を持ってひとにすすめる事が



柳悦孝考案の家庭用小型織機

出来る。これと同時に、糸車、整経台をはじめ、小道具類全部そろえて設計制作するつもり、出来る限り本格の仕事になるように、将来は材料も染めて提供出来るようになったらと思う。

私の考えでは、このような織の仕事は、どこまでも、民藝館を中心として進めて行くのが本すじのように思い、休館時等を利用して、民藝館で、講習会等を催す事がゆるされるならと考えられている。こうする事により、民藝館の仕事が、新しい生活に結びつくという

事を、一層わかり易く説明できるのではないかとも思う。

またこんな事が基で、民藝館の工藝研究所の設立の口火になるなら何よりも思う。女子美術大学も今後、年々卒業者が増える事だし、そういう人達のよりどこころを作る事も大事であろう。こうして段々希望がのびれば、工藝の仕事をする若い者が集まった村を作り、そこで皆が力を合わせあうようになれたらとしきりに思う。自分で手を染め、汗を流して仕事をするという事が、道を知る為のもっとも近い道だろう。

民藝運動に久しく若い同志を迎え得なかつた事が、今日この運動を、ひどく老化させているように思う。本当のものは常に動いて止まらない。新しい人を一人でも多く作りたい。

民藝館の工藝研究所は、他の面から見ても何としても必要である。地方に多くの伝統を持つ手仕事がある点で

は、日本は世界でも屈指の国だといわれているが、残念ながらそれは偶然、近代産業に取り残された残存民藝で、その存在の意義を自覚している例はまことに少ない。(もっともそれが本当の民藝なのかもしれない)、そのために戦後いろいろな状態がきびしく迫るにつれ、あるものは姿を消し、あるものはみにくいものに変わってきている。今のうちにこちら側でよく対策を研究し、正しく仕事が伝承され、新しく息気を入れなおされるなら、まことに日本は手仕事の国として、誇れるようにならうであろう。

民藝館の研究所がやらなければならぬ仕事はまことに多い。民藝館を民藝品の墓所でなく、新しい仕事の種苗圃にしなければならぬ。

(染織家)

昭和二十八年一月発行

「民藝通信・第十号」より

たくみ歳時記
奥会津の伝統工芸品

編み組細工のこと

農山村で、山に自生の植物を採取して作る民具を編み組細工というが、会津若松から西に入る三島町は、三十余年前から「ふるさと運動」としてこれらの物作りに力を入れている。平成十五年には国の伝統工芸品にも指定されたが、町の工人による生活工芸展や全国の作り手による編み組細工の公募



全国編組品公募展の審査風景(上)と
応募作品(中、下)

展もかなり以前から開催され、たいへんな人気である。

今年は三月七日から三日間ほど、関係者による審査会が行われた。製品は山ぶどう、アケビ、ひろろ、またたひ、科皮しな、沢くるみ、からむし(麻の一種)、蒲、篠竹や真竹など多岐にわたり、形も技の習熟度もさまざまである。だが何よりも今なおこれだけ多くの作り手が日本各地にすることが嬉しい。

スナップ写真だが、このときの会場風景を紹介しよう。

(S)

あとがき

近頃、”きもの“姿の女性を見かけることが余りない。むし暑い梅雨時となればなおさらである。ところが先日、あるデパートの陶芸展で沖縄の芭蕉布のきものを美しく着こなしている方にお会いした。すると翌日、京都での出版記念の会で、やはり芭蕉布を素敵に着ている方と同席した。いずれも琉球独特の紺の柄が生きて、感動した。

鎌倉では、よくお見かけする女性が、臙脂ようじの紺のきものでお出かけであった。芭蕉布も、絹(絹)、上布(麻)なども暑い時期ほど美しく映えるということを実感で知り、納得した思いであった。やはり美しい、夏のきもの“は世界に誇る、日本のファッションである。(S)

発行 株式会社たくみ

東京都中央区銀座八一四―二

発行責任者 志賀直邦

電話 〇三―三五七―二〇一七

FAX 〇三―三五七―二一六九

振替 〇〇―一〇―二一三五六五九

定価 六〇円(税込)